

飛鳥地域出土の尾張産須恵器

1 はじめに

現在、考古第二研究室では7・8世紀の土器編年基準資料の再整理・資料化を進めている。この作業を通して、飛鳥地域出土須恵器の中に占める尾張（猿投窯・尾北窯）産の比率の高さがあきらかになってきつつある¹⁾。これは、宮都への須恵器供給体制を考える上で興味深い現象であり、ここでは飛鳥地域への尾張産須恵器の搬入事例を提示し、それらの存在が提起する土器研究上の諸問題について、今後の見通しを含めて論及することとした。

なお、今回は基本的に山田道以南を集成の対象とし、狭義の飛鳥の範囲外ではあるが、便宜的に飛鳥川上流域の坂田寺跡を含めることとした。

また、産地比定は肉眼観察によっておこなったが、尾張産の須恵器には概して次記のような特徴がある。胎土は比較的緻密で、丁寧にクロク水挽き成形され回転ヘラケズリが多用される。色調は、焼成具合によって著しく変化し一定ではないが、7世紀後半から8世紀初頭にかけては明るい灰白色を呈するものが多い。また、しばしば墨流し風の白色土の流文が認められる。

（尾野善裕・森川 実・大澤正吾）

2 尾張産須恵器の出土事例

飛鳥地域における尾張産須恵器の出土遺跡として、現時点で把握しているのは次の8遺跡である。

川原寺下層

天智朝の創建とされる川原寺の寺域西南部の調査（『藤原概報 10』）で、寺の付属屋と目される掘立柱建物SB03に先行する遺構として検出した素掘溝SD02からの出土品に、尾張産の須恵器杯H（図106-1）が1点含まれている。伴出の須恵器・土師器食膳具の様相は飛鳥Ⅰ²⁾の特徴を示し、山田寺の造営にともなう整地土やその下層で検出された溝SD619からの出土品に近似するが、やや古相を呈する。『上宮聖徳法王帝説』裏書が、山田寺の造営開始を舒明天皇13年（641）と伝えているので、SD02出土品には7世紀でも前半に遡る年代観を与える

ことができよう。尾張では、猿投窯に属する東山44号窯から類品が出土している。

甘樫丘東麓遺跡

甘樫丘の東南麓の調査で検出した埋没谷の斜面に形成されていた焼土層SX037からの出土品。尾張産の須恵器杯H（図106-2）が1点あり、窯跡出土の類品としては、猿投窯に属する東山15号窯出土例があげられる。伴出の須恵器・土師器食膳具の様相は飛鳥Ⅰの特徴を示し、前述の山田寺整地土やSD619出土品に近似していることから、7世紀第2四半期頃のものと考えられる。土師器食膳具には火災を思わせる二次的な被熱痕跡の認められるものが多く、『日本書紀』の記述から皇極天皇4年（645）の乙巳の変で焼亡したと考えられる蘇我蝦夷・入鹿邸と関わる可能性が指摘されている（『藤原概報 25』³⁾）。

坂田寺跡

飛鳥Ⅱの標式遺構である石積護岸の池SG100（『藤原概報 3』）からの出土品。須恵器食膳具は胎土の色調・質感から大半が陶邑窯産と考えられるが、尾張産である可能性を有する杯G（図106-3）が1点含まれている。

水落遺跡

齊明天皇6年（660）に中大兄皇子が建設させた漏刻の基壇と考えられている貼石遺構（『藤原報告Ⅳ』）の埋土およびその近辺から、杯H蓋（図106-4～6）・杯H（図106-8～11）・杯G蓋（図106-7）・杯蓋（図106-12・13）・甕（図106-14）など、10点あまりの尾張産須恵器が出土している。尾張産須恵器を含め、貼石遺構周辺出土土器は飛鳥Ⅱとされている。

雷丘東方遺跡

飛鳥Ⅳの標式遺構として飛鳥浄御原宮期（672～694）に位置づけられている素掘溝SD110（『藤原報告Ⅲ』）からの出土品に、皿蓋（図106-15）・杯B（図106-18）・椀A（図106-21・22）・皿A（図106-17）・鉢（図106-20）・盤（図106-23）など多数の尾張産須恵器が含まれている。SD110は、奈良時代以降の整地に際して上半を削平されているらしく、削平部分に含まれていたと考えられる尾張産須恵器（図106-16・19）がSD110を覆う整地層からも出土しており、接合関係からSD110出土品と同一個体であることが確認できる破片も少なくない。SD110出土の須恵器について特筆すべき事項は、尾張産とほぼ断定できる杯蓋・皿蓋が「かえり」をもたないのに対して、「かえり」を

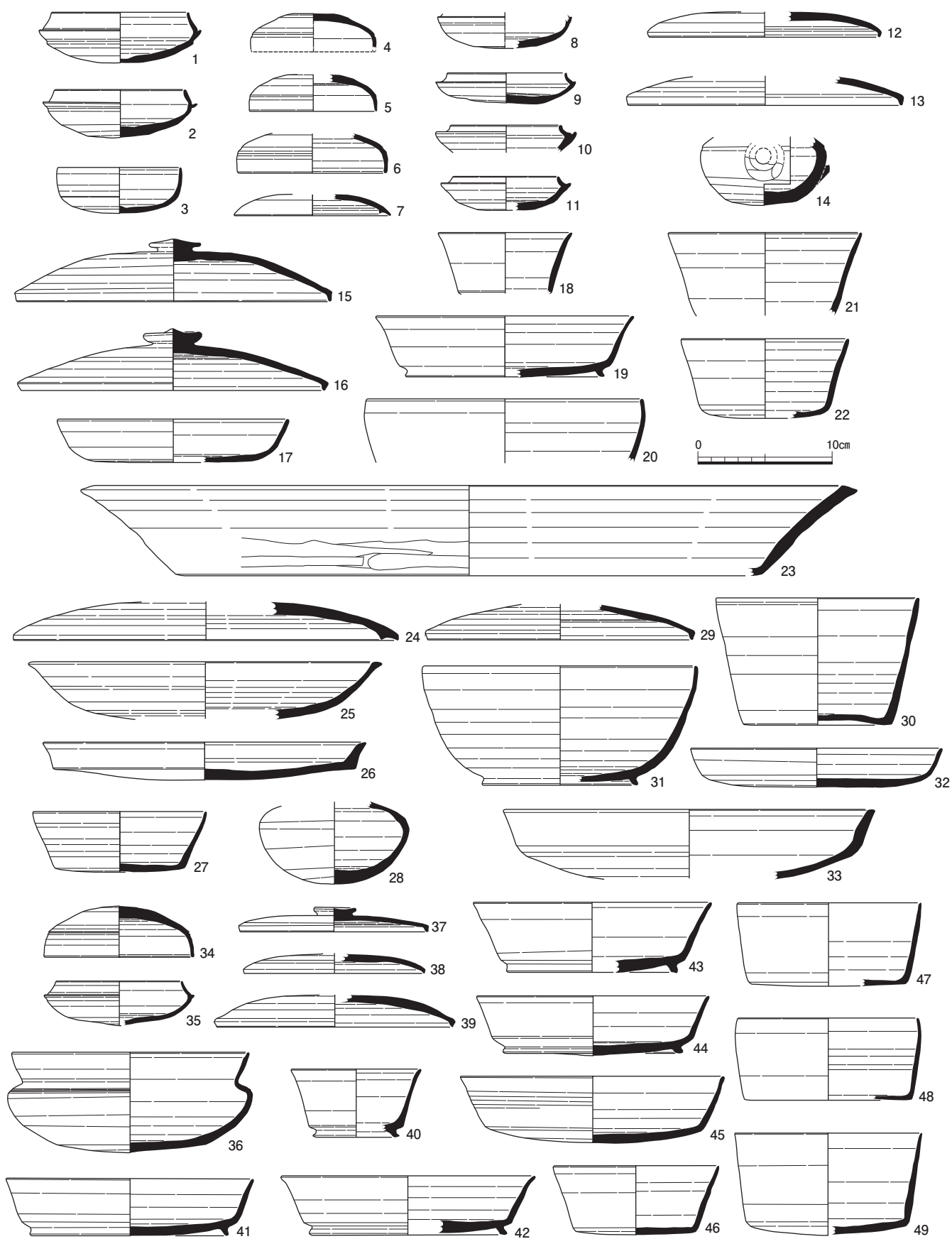


図106 飛鳥地域出土の尾張産須恵器 (1) 1 : 4

有する杯蓋・皿蓋に近畿地方産と目される個体が目立って多いことである⁴⁾。これは、同時期の土器群であって産地が異なると、新旧関係と誤認されかねない様相差が現れる可能性を示唆しており、土器群の時期的併行関係を考える上では注意が必要である。

飛鳥池遺跡

飛鳥寺東南の谷の左岸から検出した廃棄物処理土坑SK70(『年報 1999-II』)や、谷奥に形成されていた廃棄物の堆積である炭層2・3(『年報 2000-II』)から、比較的まとまった量の尾張産須恵器が出土している。

SK70 ふいごの羽口・鉢・漆壺といった工房関連遺物にとともに、尾張産須恵器の杯A(図106-27)・皿蓋(図106-24)・皿A(図106-25・26)が出土している。また、漆壺の中にも尾張産とみられる須恵器平瓶(図106-28)が含まれている。

炭層2・3 尾張産須恵器の杯蓋(図106-29)・碗A(図106-30)・碗B(図106-31)・皿A(図106-32・33)などが出土しており、特記すべき伴出遺物として富本銭とその鋳型、「五十戸」記載のある木簡があげられる。

石神遺跡

明治時代に須弥山石と石人像が発見されたことから、斉明天皇3年(657)に「須弥山像」をつくって外国使節を饗応したと『日本書紀』に記されている「飛鳥寺西」にあたと目されている遺跡。検出遺構は、A期(7世紀前半から中頃まで)・B期(7世紀後半)・C期(藤原宮期)に大別され、さらにA期はA1期・A2期・A3-1期・A3-2期・A3-3期に細分されている(『紀要 2009』)。

遺跡を南北に貫く基幹排水路と目される大溝(SD640・SD1347)をはじめとして、複数の土坑・溝から大量の尾張産須恵器が出土している。

SD4260 遺跡北部の調査で検出した素掘溝で、山田道と推定される道路遺構SF2607の盛土層よりも下層の遺構である(『紀要 2008』)。尾張産須恵器の鉢(図106-36)が1点出土しており、伴出の須恵器・土師器食膳具は山田寺の造営にともなう整地層や、その下層で検出された溝SD619出土品に近似しているので、7世紀前半に遡るものと考えられる。

SD4271 SD4260と同様にSF2607の盛土層よりも下層で検出した遺構で、杯H(図106-35)が出土している(『紀要 2008』)。直立気味の口縁部や丁寧な回転ヘラ削りなど

に甘樫丘東麓遺跡SX037出土例(図106-2)と同様の尾張産須恵器の特徴が顕著に認められるが、やや小ぶりであることに加え、蓋受け直下の稜が弱くなっている点に後出的要素が看取される。

SK1150 第7次調査でA-2期遺構群を覆う整地層の上面から検出した大型土坑(『藤原概報 18』)で、出土土器の中に尾張産須恵器の杯H蓋(図106-34)を1点含む。類品は、甘樫丘東麓遺跡SX037出土例(図106-2)と同じく猿投窯に属する東山15号窯から出土しており、概ね7世紀第2四半期頃のものと考えられる。A-3期の建物群は、SK1150を埋め立てた後に営まれているので、石神遺跡A-2期からA-3期への推移年代を考える上で、この年代観は一つの目安となろう。

SK1285 第7次調査で検出した大型土坑で、A-3期の掘立柱建物SB1300よりも新しい。出土土器には、杯蓋(図106-37~39)・杯B(図106-40~44)・杯A(図106-45)・碗A(図106-46~49)など食膳具を中心に多数の尾張産須恵器が含まれている。詳細については後述する。

SD640 遺跡の南半部で検出した基幹排水路と考えられる南北溝で、既刊の概要報告(『藤原概報 14~19』『紀要 2003~2008』)では藤原宮期の遺構とみなす見解と、飛鳥浄御原宮期の遺構とする見解が示されている。今回、出土土器をあらためて検討したところ、SK1285出土品ともども飛鳥Ⅳの標式遺構たる雷丘東方遺跡SD110出土品(図106-15~23)と高い共通性が認められ、接続する南北溝SD1347で天武朝の紀年や当時のサト表記「五十戸」の記載がある木簡が出土していることから、飛鳥浄御原宮期の遺物とみなして基本的に問題ないと考えられた。これは、「五十戸」記載のある木簡や、天武天皇12年(683)初鑄と考えられている富本銭とその鋳型が伴出した飛鳥池遺跡炭層2・3出土須恵器(図106-29~33)との間にも高い類似性が認められることと矛盾しない。また、SD640からの出土土器量は他の遺構と比べて桁外れに多く、廃棄の契機を藤原宮の成立にともなう飛鳥からの宮の移転に求めることができる。第3・4次調査出土分から抽出した202点の須恵器の中に含まれていた尾張産須恵器は、ほぼ確実なものだけで23%、そうである確率が高いものまで含めると38%を占めており、杯蓋(図107-50~57)・皿蓋(図107-58)・杯B(図107-59~62)・皿B(図107-63・64)・杯A(図107-65~68)・碗B(図107-69・70)・

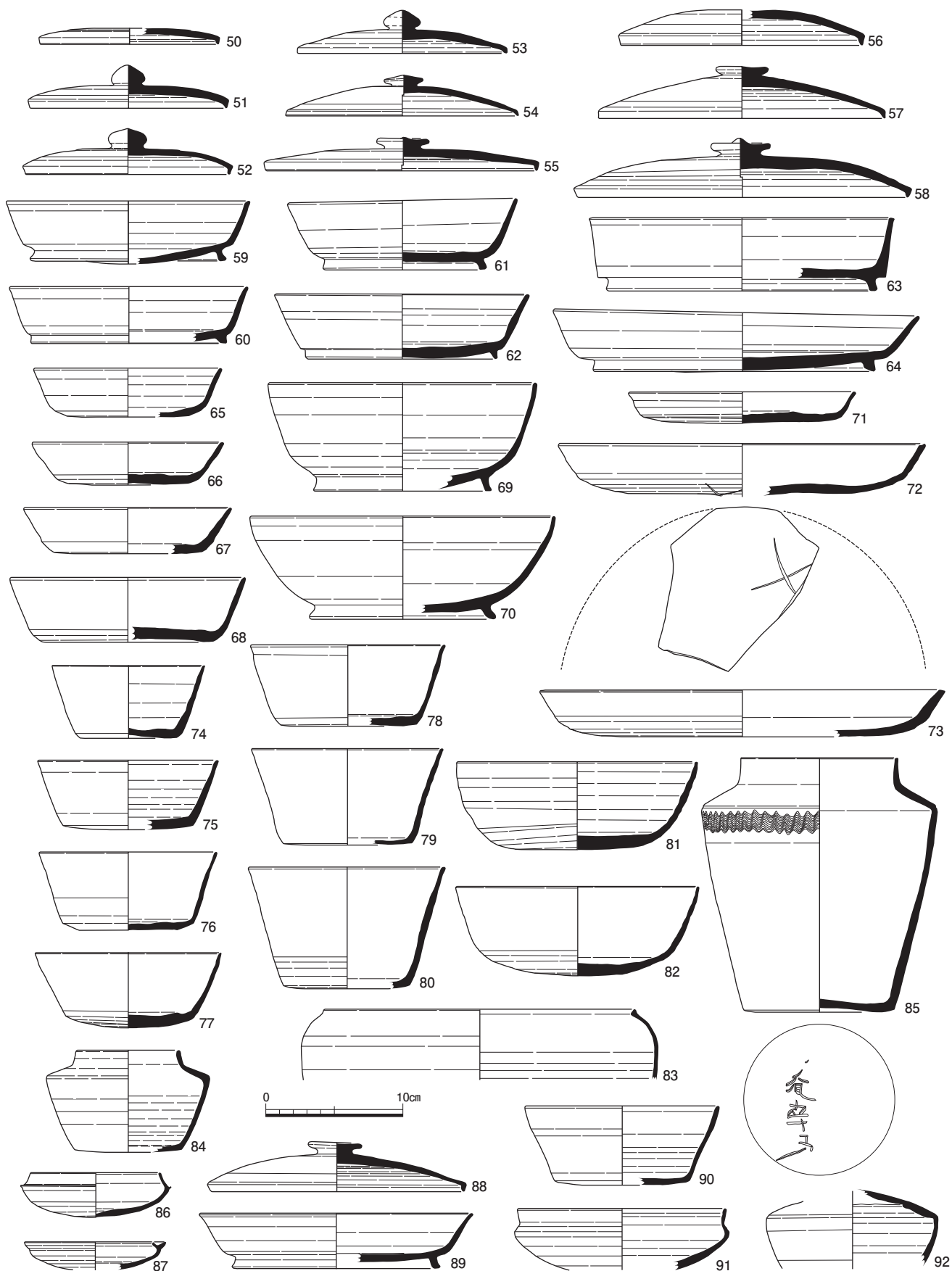


図107 飛鳥地域出土の尾張産須恵器(2) 1:4

皿 A (図107-71~73)・碗 A (図107-74~82)・鉢 (図107-83)・壺 (図107-84) など多様な器種が認められる。底裏に「盆五十戸」とヘラ彫りされた壺 (図107-85) は、第5次調査での出土。

SD1347 斜行溝SD1346を介してSD640に接続する南北溝SD1347からも尾張産須恵器は少なからず出土しており (『紀要 2007』)、ここではその一部を紹介する。SD1347は南半部を素掘溝のSD1347Aから石組溝SD1347Bへ改修されており、北半部ではSD1347A自体に掘り直された形跡が認められる。したがって、SD1347出土土器には一定の時間幅を考慮する必要があるが、SD640の廃絶時期からも基本的には飛鳥浄御原宮期の幅の中でとらえられる。図示した尾張産須恵器 (図107-86~92) は、第15次および第18次調査区から出土したもので、概ねSD640出土品と共通した様相を示すが、ごく少量の杯 H (図107-86・87) の出土が特筆される。

飛鳥京跡

飛鳥浄御原宮の北限を画するとされる石組溝SD0901から、まとめて投棄されたとみられる状態で出土した土器⁵⁾に、おびただしい量の尾張産須恵器が含まれている。調査報告書で図示されている須恵器331点のうち⁶⁾、尾張産と判断してほぼ間違いのないと思われるものだけでも110点⁷⁾と、須恵器全体の33%を占めている。尾張産である確率が高いと考えられるもの⁸⁾まで含めるならば、その数は158点となり、実に全体の48%におよぶ。器種は、杯蓋・杯 A・杯 B・碗 A・皿 A・皿 B・高杯・鉢 A・壺 B・平瓶・甕など多岐にわたるが、須恵器全体の中に尾張産の占める比率は、壺・瓶・甕などの貯蔵具よりも杯・碗・皿などの食膳具で高くなる傾向にある。

SD0901出土土器については、土師器食膳具が飛鳥Ⅳの様相を示すことが指摘されている一方で⁹⁾、須恵器杯蓋の大半が「かえり」をもっていないため、藤原宮期の土器群として飛鳥Ⅴに位置づける見解もある¹⁰⁾。しかし、尾張産の杯蓋・皿蓋に「かえり」なしが多いという雷丘東方遺跡SD110出土品の所見を踏まえるならば、「かえり」をもつ杯蓋の少なさは尾張産の比率の高さに起因しているのではないかと考えられ、SD0901出土土器群を飛鳥浄御原宮期の遺物とみなすことも可能と思われる¹¹⁾。

(尾野・大澤)

3 石神遺跡出土品の計量的検討

ここまでの検討から、7世紀後半の飛鳥地域において、尾張産の須恵器がかなり多く消費されていたという見通しが得られた。続いて検討を加えたいのは、石神遺跡における須恵器食膳具の多法量的様相についてである。ここでは2つの土器群を用い、須恵器食膳具の大きさに関する計量的な検討をおこなってみよう。以下では、須恵器食膳具の口径分布を5mm階級のヒストグラムで表し¹²⁾、それぞれの器種で複数のピークを認めた場合は、大きいほうから順に a・b・c…または、①・②・③…と番号を付すことにしたい。また、ヒストグラムの左側には、口縁部残存率の割合を示す横棒グラフを掲出し、原データの信頼度を示してあるので、あわせて参照されたい (図108)。

SK1285

SK1285からは整理箱で15箱分の土器 (飛鳥Ⅳ) が出土した。土師器・須恵器の食膳具構成をうかがうに足る良好な資料である。尾張産の須恵器を一定量含んでいるので、それらを含め計測の対象とした。以下、統計図表の解釈も含め、標本数が比較的多い須恵器杯 B から適宜解説を加えてゆくが、杯蓋については、杯 B や碗 A、碗 B など、それぞれの器種について述べるなかで触れることにしたい。これは、これまで無蓋容器とされてきたものにも蓋が被る可能性を認めたからである。

杯 B 口径14.0~19.0cm、器高3.5~6.0cmの有高台杯 (N=9)。器高は口径に比例して大きくなる。口径分布は①17.0cm以上と②14.0~15.5cmとに分かれており、小破片のため復元口径の信頼度を担保できない破片 (N=14) を含めると後者のほうが多い。②は『藤原報告Ⅱ』における杯 B Ⅲ¹³⁾ にあたり、SK1285出土品でもっとも小さいものは、口径が14.2cm (実測値) であった。尾張産は含まない。①はこれまで杯 B Ⅰ・杯 B Ⅱと呼ばれてきたものにあたるとみられ、主に尾張産からなる。

SK1285の杯 B Ⅲには、かえり付の杯蓋が重なるようで、それらの蓋は口径が14.5~16.5cmである (a)。一方、かえりをもたない杯蓋はこの区間がほぼ欠落していて、18.0cmの1例 (d) は尾張産である。次に述べるSD640での状況も加味すると、①にはかえりをもたない杯蓋が対応するものと思われる。

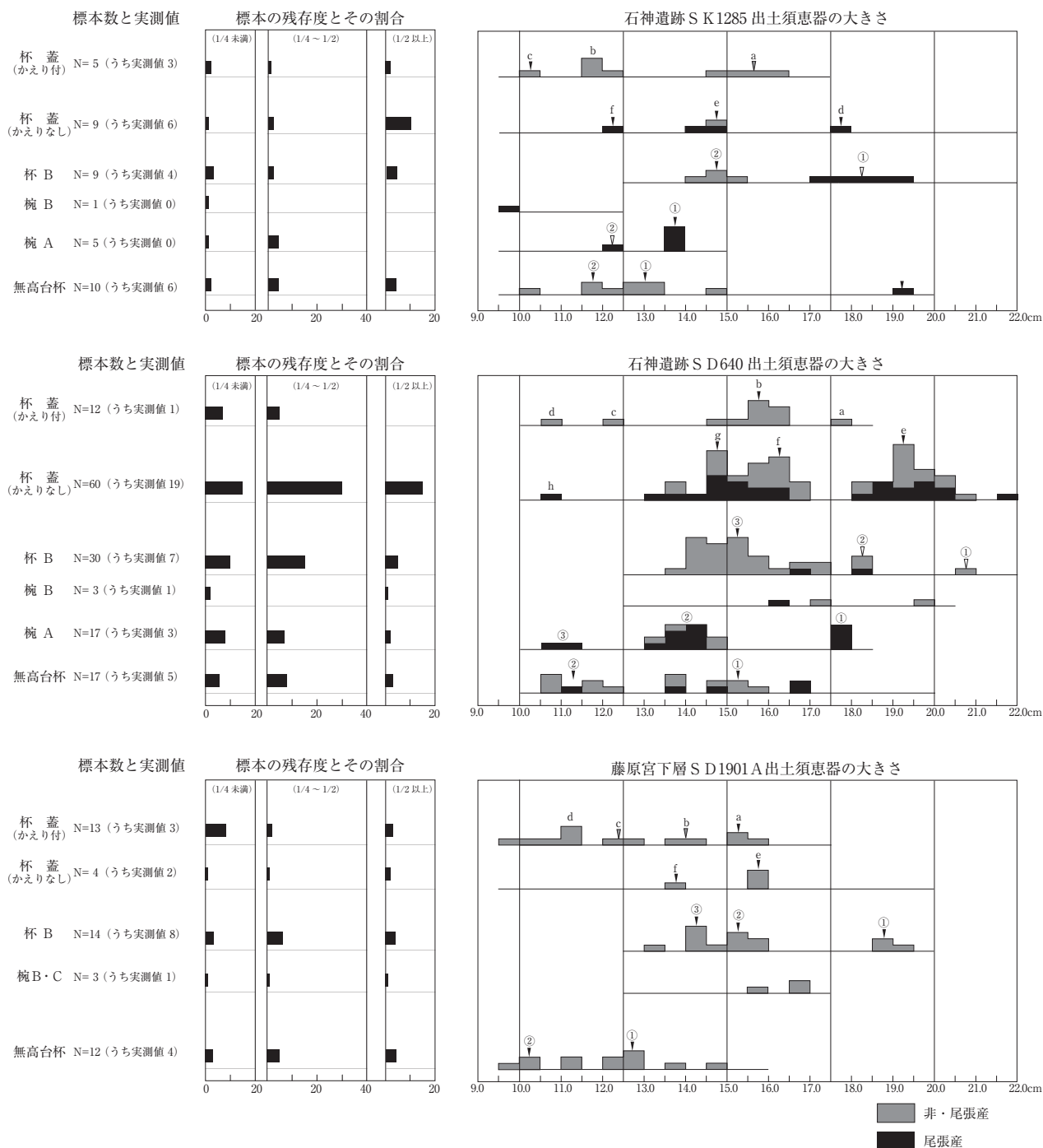


図108 須恵器食膳具の口径分布

碗 A 器高5.0～7.0cmの無高台碗（N = 5）で、器高は口径に比例して大きくなる。口径は①13.5～14.0cmと、②12.0～12.5cmとに分かれて分布するが、SD640のように標本数が多くなれば、ただ一群にまとまる可能性がある。口径復元の困難な小破片も含め、ほとんどが尾張産である。

尾張産の須恵器には、これらの碗Aもしくは杯BⅢに被るとみられる大きさ（口径12.4～14.5cm）で、「かえり」をもたない蓋が3個体ある（e・f）が、SK1285出土品のなかに尾張産の杯BⅢは確認できない。このような状況はSD640の杯B・碗Aと杯蓋との関係においても同じである。したがって、尾張産の碗Aに対応する大きさの

尾張産の杯蓋は、産地の一致によっても一具であるとみるのが妥当であろう。

無高台杯 無高台の器種である杯Gと杯Aとは、そもそも中間的特徴を示す個体もあり、その区別は小論の目的ではないから、ここでは2つの類似器種を「無高台杯」としてまとめておこう。SK1285では10点を数える。これらの口径は主に①12.5～15.0cmと、②12.5cm未満とに分かれている。さらに19.0cm台のものがわずかに1点あるが、これは尾張産である。①・②と杯Bとは、口径分布がわずかに重なるものの、あきらかに離散的である。

これら無高台杯の一部には、かえりを付した蓋が被る可能性が高い。というのは、SK1285出土のかえりを付した杯蓋で口径12.5cm未満のもの(b・c)が、これよりも大きい杯Bに被ることはないからである。

杯 B 前述の杯Aに高台を付したものである。SK1285では有高台・背高の杯Bは1例を数えるのみで、これは尾張産である。

SD640

現在のところ、SD640出土土器は第3次調査から第5次調査分まで整理作業が進んでおり、ここで用いる計測値はすべて、この間に整理した須恵器のものである。このため今後の整理作業により、計測標本の増加が見込まれる。ここでもまた、杯蓋と各器種との関係は、必要な範囲で随時説明することにしよう。

杯 B 口径13.5～21.0cm、器高3.5～6.0cmの有高台杯。器高は口径に比例して大きくなる。SD640出土例(N=30)の口径分布は①20.0cm以上、②16.5～18.5cm、そして③13.5～16.5cmの3つに分かれる。②と③との境界は不明確だが、ともかく杯Bの主体が③=杯BⅢであるのはあきらかである。ただし、SK1285と同じく③のなかに確実な尾張産は含まれていない。

SD640の杯蓋も、「かえり」付のものと「かえり」をもたないものからなるが、前者はその口径(14.5～18.0cm; a・b)から考えて、大部分が杯BⅢの蓋とみえる。一方、かえりをもたない杯蓋はやや複雑で、大きいほうから口径18.0～21.0cm(N=26、e)、15.0～17.0cm(N=20、f)、そして13.0～15.0cm(N=13、g)と連なり、後二者は一部で重複している。このうち、口径がもっとも大きいeは、少なくともその半数(N=13)が尾張産であるのに対し、fは尾張産とみられるもの(N=7)を

除き、大部分が杯BⅢの蓋にあたるようである。そうすると、gには尾張産のもの(N=5)とその類似品とが残ることになるが、それらは必ずしも杯BⅢの蓋ではない。尾張産の杯BⅢは出土していないからである。したがってgの多くは、SK1285で考えたように、主に尾張産の杯Aに被るものであろう。

杯 A 器高5.0～10.0cmまでの背高の無高台杯で、器高は口径に比例して大きくなる。杯A(N=17)の口径分布は、SK1285よりも明確である。これは資料数がやや多いためで、①口径17.5～18.0cm、②13.0～15.0cmと、③10.5～11.5cmとにピークがある。①は4点すべてが尾張産で、底部から口縁部にかけてやや丸みを帯び、いわゆる鏡形に近い。②はいわばバケツ形で、12点中8点が尾張産である。

②の杯Aに対応するのは尾張産の杯蓋で、それらは前述のように口径13.0～15.0cm、すべて「かえり」をもたない(g)。同様に、①の杯Aに対しても、「かえり」をもたない大口径の杯蓋(eの一部)が重なる可能性がある。

無高台杯 口径10.5～17.0cm、器高3.0～5.0cmで、高台をもたず、杯Aよりも浅いものを指す(N=17)。口径は①14.5～16.0cmと、②10.5～12.5cmとに分かれ、17.0cmと14.0cmともそれぞれ小さなピークがある。杯蓋で口径12.5cm未満のもの(c・dおよびh)は、主に②に被るものであろうか。

杯 B 杯Aに高台を付したもので、SD640では口径16.5～20.0cm、器高6.5～10.0cmである。3点中の1点が尾張産である。その口径からみて、これらに被る蓋はeないしはfの一部であろう。

藤原宮下層・SD1901Aとの比較

ここまでは石神遺跡出土の須恵器を中心に、尾張産のそれらが加わることで、須恵器の食膳具構成がにわかに多法量的様相を帯びることをみてきた。そこで次には、石神遺跡SK1285、およびSD640とほぼ同時期であって、かつ尾張産の須恵器食器をほぼ欠いている対照群として、藤原宮下層SD1901Aの須恵器を用いて、石神遺跡の土器群との比較を試みたい。

SD1901Aは藤原宮の中枢部を南北に貫く運河で、これまでに藤原宮第20次調査・飛鳥藤原第186次調査(大極殿院)、飛鳥藤原第153次調査・飛鳥藤原第169次調査(朝堂院)などで調査が進んでおり、とりわけ第20次調査に

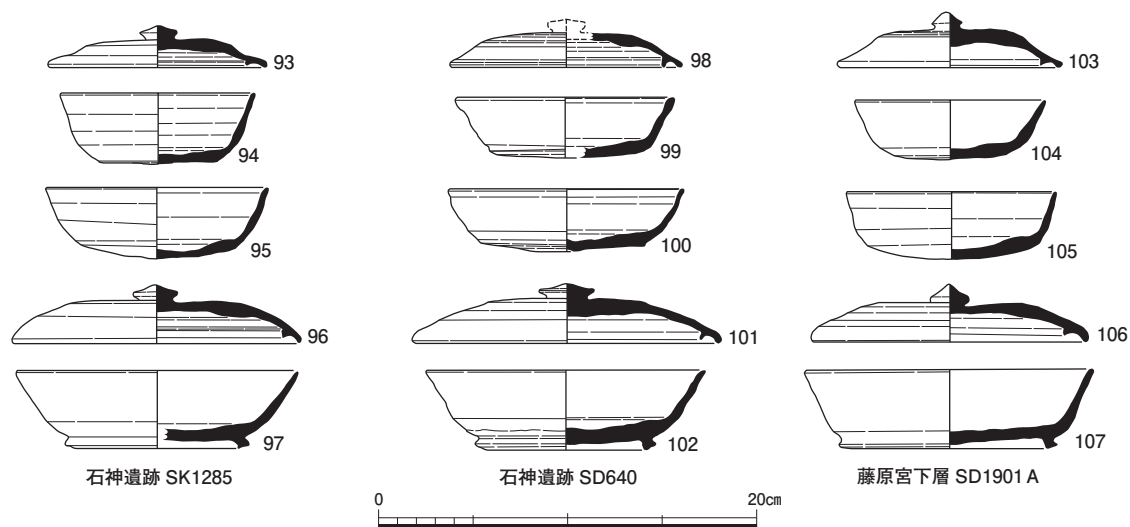


図109 石神遺跡・藤原宮下層出土非尾張産須恵器比較図 1:4

において、天武天皇11～13年（682～684）の木簡とともに多量の土器が出土している。そこで以下では、第20次出土の須恵器食器を計測し、石神遺跡との比較対照群とするが、その標本数はSD640に遠くおよばない。このため、第20次出土分をわずかでも補完すべく、昨年度の発掘調査（第186次）で出土した土器（本書71頁の図79-1～35）のなかから須恵器の食膳具を選び、計測資料を追加することにした。なお、第20次調査と第186次調査とは、ともに藤原宮大極殿院の調査で、大極殿を挟んで北側に第20次調査地、南側に第186次調査地がある。相互の距離は最短で約40mで、土器様相に大差はない。

杯 B 口径13.0～19.5cm、器高3.5～5.0cmの有高台杯（N=14）で、器高は口径に比例して大きくなる。口径分布は①18.5cm以上と②14.5～16.0cm、そして③13.0～14.5cmとに分かれ、②・③が多い。尾張産を含まない。これらに対応する杯蓋は、「かえり」の有無にかかわらず、13.0～16.0cmの間に分布している（a・bおよびe・f）。これら杯蓋の計測値は、細かくみるとおよそ15.0cmを境に二分できるが、資料の増加がこの空隙を埋める可能性がある。いずれにせよ、この大きさの杯蓋は、そのほとんどが杯BⅢであるか、次に述べる碗B・碗Cの蓋にあたるであろう。

碗B・C 碗Bは第20次調査出土の1例がある。それは口径16.6cm、器高6.7cmで、杯Bからは器高で区別できるものの、尾張産ではない。碗Cは器高6.0～7.0cmの有高台碗で、口縁部が内彎気味に立ち上がるものである（本書71頁の図79-31・32）。このような有高台碗は、石神遺

跡のほうではあまりみかけない。口径は15.5～17.0cmで、杯BⅢの口径分布とはほぼ重なりあわない。SD1901Aの須恵器碗B・碗Cはいずれも有蓋容器であったとみられるが、これらに見合う蓋はあきらかでない。

無高台杯 12点を数える。これらは①口径12.1～13.5cmと、②口径10.1～11.5cmとに分かれているが、いずれも尾張産ではない。第186次調査では、②に含まれる杯Gとその蓋が、運河機能時の粗砂層より上位の埋立土から出土している。このうち、杯Gの蓋とみられるもの（d）は6点を数え、そのなかの5点は口径9.6～11.5cmの範囲に分布している。杯Gのほうは口径10.2cm、器高3.6cmである（N=1）。

比較と解釈 SD1901Aの須恵器食膳具と、石神遺跡のそれらとを比較するとき、まず気づくのは前者において、大口径の杯Bや、それらの杯蓋がほぼ欠落していることである。また、石神遺跡では主要器種の一角を占めている尾張産の須恵器碗Aも、SD1901Aではほぼ欠如している。そしてこのため、SD1901Aの須恵器食膳具は、杯BⅢを主体とし、一定量の無高台杯をともし、点では石神遺跡と変わらないものの、それ以外の器種がかなり少ない。石神遺跡との比較でいえば、この状況はひとえに、尾張産須恵器の欠如によるものである。見方を変えらば、SD1901Aのような様相を標準とすると、石神遺跡は実に多法量的な様相を呈していることになるが、それは尾張産をはじめとする東海地方の須恵器を多く含んでいるからである。

また、今回の計量的検討では、尾張産の碗Aが有蓋容

器であった可能性を指摘できた。口径分布の統計図(図108)は、無高台の食膳具(尾張産の椀A)に蓋が被さることを示しており、実際に愛知県長久手町の丁字田1号窯では、生焼けの一括資料で椀Aと「かえり」付の蓋と一緒に出土している¹⁴⁾。今回の計量的分析は、こうした窯場での出土例によらずとも、身と蓋とが対応関係にあることを如実に示しているのであって、こうした手法の有効性を端的に示しているのである。

したがって今後、これまで杯B蓋とされてきたものと身となる器種との対応関係を、先験的に決定するのは厳に慎まねばならないだろう。蓋と身との関係は、土器群ごとで個別の分析を重ねつつ、総合的に判断する必要がある。SK1285では椀Aの蓋にあてたものが、別の土器群でも同じ器種の蓋であった、とは限らない。

ここまでをまとめておこう。ある土器群が質・量ともに充分であるとき、そのなかでの産地構成が一部でもあきらかなれば、その土器群の調査研究に益するところが大きい。そして、少なくとも飛鳥地域における7世紀後半の土器群に関していえば、そこに表れている「多法量的」様相は、尾張産須恵器の大量消費を強く反映したものである、と考えることができる。しかしながら、運河SD1901Aやその他の既出資料の比較によってもあきらかなのは、石神遺跡の主要器種、すなわち須恵器杯BⅢが、どういうわけかあきらかな尾張産を欠いているらしい、という事実である。こうした状況が、単に石神遺跡に固有の様相であるのかどうかを判断するためには、さらなるデータの収集を待たねばならないが、なかでも重要となってくるのが、藤原宮(飛鳥Ⅴ)の土器群である。この点は今後の課題とし、当分はデータの蓄積を図りたいと思う。(森川)

4 尾張における須恵器生産の動向と飛鳥

飛鳥地域の遺跡から出土した尾張産須恵器を通覧してまず気づくことは、7世紀中頃までの事例(川原寺下層SD02、甘樫丘東麓遺跡SX037、坂田寺SG100、石神遺跡SD4260・SD4271・SK1150)がいずれも単発的であるのに対して、7世紀後半でも飛鳥浄御原宮期(672~694)の事例(雷丘東方遺跡SD110、飛鳥池遺跡SK70・炭層2・3、石神遺跡SK1285・SD640・SD1347)では爆発的増加をみせていることである。現時点では、数量的な裏付けを提示す

る準備ができていないが、この増加は単なる産地構成の変化ではなく、宮およびその周辺域における人口の爆発的増加と、それにともなう土器使用量の増大と連動した現象ではないかとの見通しをもっている¹⁵⁾。

すなわち、律令制の整備にともなって飛鳥浄御原宮期に宮と周辺域への人口集中が急激に進み、土器需要が飛躍的に増大する中で、それまで飛鳥地域への須恵器供給を中心的に担ってきた陶邑窯以外の生産地として、尾張が注目されるようになったのではなかろうか。今回の集通を通して、尾張産須恵器を大量に含む土器群(石神遺跡SK1285・SD640、飛鳥京跡SD0901など)には美濃須衛窯の須恵器も多いという感触を得ており、壬申の乱を勝ち抜いた天武天皇の擁立基盤が美濃・尾張の豪族層であったことを考えるならば、飛鳥浄御原宮期に宮都へ尾張・美濃産須恵器が大量に供給されていることも理解しやすい現象ではないかと思われるのである。

ただし、このように考える場合、水落遺跡から10点あまりもの尾張産須恵器が出土していることをどう解釈するか、という次なる課題も生じてくる。この問題については、生産地である尾張の須恵器生産の動向とあわせて後述する。

また、石神遺跡SK1285・SD640出土品と藤原宮下層SD1901Aの出土品の比較を通して、同じ飛鳥浄御原宮期の土器群であっても産地構成と法量構成がまったく異なっていることがあきらかとなったが、ここに宮中枢部で用いられたと考えられる飛鳥京跡SD0901出土品を加えると、その様相差はさらに際立ってくる。すなわち、尾張産須恵器は宮外官衙と目される石神遺跡よりも宮中枢部で多く用いられており、食膳具の「多法量化」も大型品が目立つという点でより顕著である。

こうした様相を説明するには、人口の増加にともなう不足分を補うために尾張から大量の須恵器が運ばれてきたという単純な図式だけでは不充分であり、予め宮中枢部での使用を想定した須恵器の生産が尾張の窯場に求められたことを示していると考えらるべきであろう。先に、同じ飛鳥浄御原宮期の須恵器であっても、尾張産の杯蓋・皿蓋に「かえり」のないものが多く、近畿地方産と目される杯蓋・皿蓋に「かえり」をもつものが多いことを指摘したが、宮都近隣地域(近畿地方)よりも尾張が流行の先を行くという一見不可思議な現象は、このよう

に考えることで無理なく説明ができる。

ところで、如上の認識を踏まえた上で、あらためて尾張における須恵器生産の動向を概観してみると、この時期（飛鳥浄御原宮期）に窯跡の分布域が飛躍的に拡大するという興味深い現象に気づく。約20km四方にわたって広がりを見せる猿投窯は、古代日本における日本有数の窯業生産地として著名だが、7世紀半ばまでの窯の分布は、山塊や水系を目安に7区分されているなかでも西端の東山地区に限られている。ところが、7世紀後半になると窯の数自体が急激に増加すると同時に、隣接する岩崎地区や鳴海地区にまで分布域が広がってゆく。まさにその時期が飛鳥浄御原宮期に相当していることは、岩崎地区の高針原1号窯や丁子田1号窯・市ヶ洞1号窯など当該期の複数の窯跡から、天武朝での使用例が多いサト表記の「五十戸」とヘラ彫りされた須恵器片が出土していることから、妥当な推論であろう¹⁶⁾。

また、7世紀前半には生産が低調であった尾北窯でも、ほぼ同時期に篠岡地区で篠岡2号窯が操業を開始しており、8世紀初頭頃まで築窯が相次いでいる。石神遺跡出土の須恵器片に記されていたのと同じ「尾山寸」の文字がヘラ彫りされた須恵器片が、やはりこの時期に属する篠岡78号窯から出土しているという事実は、猿投窯のみならず尾北窯からも飛鳥地域へ須恵器が供給されていたことを雄弁に物語っている¹⁷⁾。

つまり、宮都たる飛鳥地域への須恵器の大量供給が、こうした尾張における須恵器生産の活況を惹起せしめ、燃料の薪となしうる森林資源を追い求めて窯の分布域が拡大したと考えられるのである。7世紀半ばまでの猿投窯の分布域が東山地区内部にとどまっているのは、地域社会の需要を満たすためだけならば、東山地区の内部だけで燃料薪を調達しても、森林資源が回復する程度の生産規模で充分に賄うことができたからだろう。

このように、飛鳥浄御原宮期の飛鳥地域への須恵器供給は、尾張における須恵器生産の様相を一変させたと思しいが、それは単に生産量の増大や生産地域の拡大にとどまるものではなかった。高針原1号窯では、杯H主体（Ⅱ群下層・中層）から杯H・A・Bが共存する段階（Ⅱ群上層）を経て、杯A・B主体（Ⅰ群・窯体内）へと生産内容を変容させていることが灰原の分層発掘を通して明らかにされており、灰層のまさに杯H・A・Bが共存す

る層準（Ⅱ群上層）から「五十戸」ヘラ彫り須恵器片（図110-117）が出土している。この事実は、杯Hから杯A・Bへと主力製品の転換が図られたのが天武朝であろうことと共に、その転換の契機が宮都たる飛鳥への須恵器供給であったことを強く示唆するものに他ならない。ここでは傍証として、丁子田1号窯と市ヶ洞1号窯においても、「五十戸」ヘラ彫り須恵器片が杯H・A・Bと灰層の同一層準で共存することが確認されていることを指摘しておこう（図110）。

これらの事例から、尾張においては天武朝に至っても須恵器杯Hがなお一定量生産されていたと考えられるが、出土事例をみる限りそれらは杯A・Bほど大量に飛鳥地域へもたらされてはいなかったようだ。宮都への供給を目的として新たに生産されるようになった杯A・Bに対して、天武朝の尾張で生産されていた須恵器杯Hは、基本的には地域社会（尾張および近隣）の需要を満たすものであったと思われる¹⁸⁾。

ただし、宮都の求心力の強さは必ずしも宮都への供給が予定されていなかった物資に作用することもあるから、杯Hが飛鳥へもたらされることがあってもよい。下層に先行する時期の遺構が確認されているので、混入である可能性を完全には否定できないが、石神遺跡第18次調査でSD1347Aから出土した2点の尾張産須恵器杯H（図107-86・87）は、高針原1号窯で杯A・Bに共伴した杯Hと形質的に高い共通性を示している。

また、水落遺跡で貼石遺構の埋土や周辺から出土した尾張産須恵器の杯H（図106-4～6・8～11）は、いずれも高針原1号窯で「五十戸」ヘラ彫り須恵器片と共伴した杯Hよりも全体に小ぶりであることに加え、蓋肩部や身の蓋受け直下の稜が不明瞭（凹線）化している点でも後出的で、天武朝（以降）に生産されたものである蓋然性は決して低くない。『藤原報告Ⅳ』で後世遺物の混入である可能性が指摘された「かえり」のない杯蓋2点（図106-12・13）も、尾張産とみられることを勘案するならば、これらの水落遺跡出土尾張産須恵器の一群を、まとめて天武朝の所産と見なすことは十分に可能である¹⁹⁾。

ただし、誤解のないように付言しておくならば、これらの尾張産須恵器が天武朝に降るものであったとしても、それは水落遺跡が斉明天皇6年（660）に中大兄皇子によって建設された漏刻であることを否定するもので

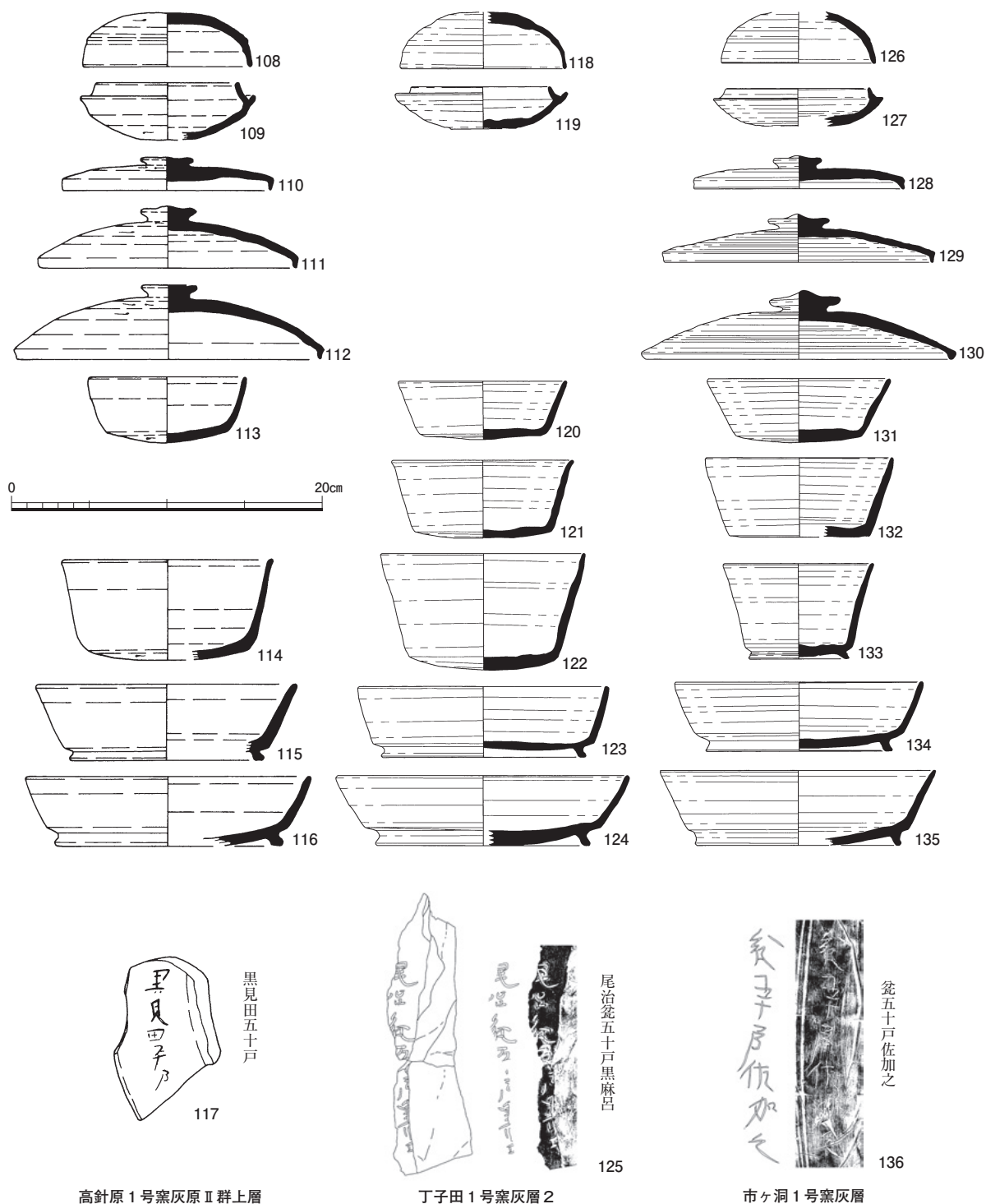


図110 「五十戸」ヘラ彫り須恵器片に共伴した須恵器杯類 1 : 4 (註16) 文献より一部改変

はない。なぜなら、水落遺跡の尾張産須恵器の多くは漏刻の覆屋と目されている礎石建物SB200の基壇である貼石遺構の人為的な埋立土や柱抜取穴からの出土であって(図106-4・8・9・13)、SB200が廃絶した時期を推測する手がかりではありえても、漏刻が機能していた年代を

直接的に示すものではないからである。

『日本書紀』によれば、斉明天皇6年に中大兄皇子が建設させた漏刻は、大津宮に新造された台の上へ天智天皇10年(671)に移設されたらしい。このため、水落遺跡(A期)の廃絶年代は天智天皇10年もしくは大津遷都の天智

天皇6年(667)と考えられがちであるが、そもそも『日本書紀』に記されているのは漏刻の移転年代であって、覆屋の廃絶時期ではない。つまり、漏刻移転後も覆屋が解体されずに残っていた可能性は否定できないのであって、SB200の解体・廃絶年代が天武朝に降っても、水落遺跡を漏刻とする解釈や『日本書紀』の記述との間にまったく齟齬をきたさないのである。

むしろ、漏刻の撤去に際して地下構造物(木樋・小銅管)が残されたままになっていることや、地下構造との接続部分である大銅管を折り取った形跡が確認されているという事実は、大津宮へ移設された漏刻が本体の地上部分だけであったことを強く示唆するものである。また、漏刻の移設とSB200の解体時期の間に一定の時間差があったとする考え方は、漏刻廃絶後だがB期以前とされる不審なふいご羽口やとりべ・鉾滓の存在(これらについては報告書で指摘がある)の説明を容易にするものであり、発掘調査成果との間に一切の矛盾は生じない。

このように考えてくると、貼石遺構埋土最下層の粘土層からの出土品(尾張産須恵器では図106-5・14が該当)といえども、帰属時期を漏刻機能時に限定できないことはあきらかであろう。むしろ、国家が威信をかけてつくらせた漏刻の基壇に清掃が行き届かず、廃棄物が投棄されたり泥土が堆積するとは考えにくいのであって、貼石遺構埋土最下層(粘土層)といえども漏刻移転後に堆積した蓋然性は決して低くない。報告書でも述べられているように、最下層の粘土層から出土した土器片と、埋立土や柱抜取穴から出土した土器片の間には、接合関係から同一個体と判明するものが少なからず含まれている。この事実は、それらが漏刻の機能時のものであるよりも、SB200解体時に廃棄されたものであることを強く示唆するものであろう。

つまり、水落遺跡の貼石遺構やその周辺から出土した尾張産須恵器の一群が、時期的に天武朝に降るものであったとしても、遺構・文献解釈上まったく問題はなく、飛鳥への尾張産須恵器の大量供給を飛鳥浄御原宮期以降と考える小論の立場とも抵触しない。また、漏刻撤去後もSB200が残っていたと仮定した場合、その解体時期が問題となるが、これも天武朝を中心とする飛鳥浄御原宮期と考えると、過去の調査所見との整合性は高くなると思われる。

なぜなら、水落遺跡に隣接する石神遺跡が天武朝に遺跡の性格を一変させていることは、これまでの調査を通して度々指摘されており、水落遺跡SB200の解体と貼石遺構の埋め立てや整地も同時期のことと解釈する途が開かれるからである。とりわけ、石神遺跡の西南部を中心に広い面積にわたって検出されている整地層の含炭褐色土は、炭化物や鉾滓を多く含んでいるという点で水落遺跡貼石遺構の埋立土やSB200柱抜取穴埋土と共通しており、三者は一連の工事にともなうものではないかとも思われる。遺構の詳細な検討も、遺物の整理も十分にできていないため、現時点で断定してしまうことは憚られるものの、今後石神遺跡の遺構解釈を進めていく上で、検討の俎上に載せるに足る一案ではないかと思われる。

(尾野)

5 おわりに

以上、飛鳥地域出土品の事例紹介を通して、飛鳥浄御原宮期には大量の尾張産須恵器が宮都へと搬入されていることが示せたと思う。今回は尾張産須恵器に絞って提示しているが、石神遺跡SK1285・SD640出土品の中には美濃須恵窯産須恵器もかなりの量が含まれているという感触を得ており²⁰⁾、須恵器全体の過半を東海地方産が占めているのではないかという印象をもちつつある。これは、奈良時代前半までの宮都への須恵器供給の中心的存在が、必ずしも一貫して陶邑窯であったとは限らないことを示唆しており、本書で別途紹介した奈良山における須恵器生産の問題(38・39頁)ともあわせて、宮都出土須恵器の生産地構成の解明は急務である。

なぜなら、生産地による違いを考慮せず、飛鳥Ⅰ～Ⅴの枠組みで示されている器種の消長を単純にあてはめるだけでは、場合によっては年代を見誤ることが危惧されるからである。水落遺跡出土の尾張産須恵器杯Ⅱも、従来の編年観を機械的に適用するならば、飛鳥Ⅱとして7世紀半ばに位置づけざるを得ないが、尾張では天武朝まで生産され続けていたと考えられることは既述のとおりである。

こうした一種の保守性が、単に尾張地域に特有の現象であるのか、東日本あるいは宮都以外の地方社会に相当の普遍性をもって認められるのかは、今後慎重に検討する必要があるが、産地差の視点を導入するならば、従来

ともすれば前時代遺物の混入とみなされてきた資料の中から、同時代のものとして積極的に位置づけうる事例が宮都でも少なからず見いだされるかもしれない。

その場合、飛鳥Ⅰ～Ⅴという枠組み自体を見直す必要が生ずることも考えられないではないが、編年を論ずるにあたって産地・系統別に議論する必要があるのは土師器もまた同様である。今後、須恵器の産地構成だけではなく、土師器の産地・系統研究をあわせて進めてゆく必要性を痛感している。

(尾野・森川・大澤)

謝辞

小稿作成の過程で、飛鳥京跡SD0901出土品は奈良県立橿原考古学研究所、高針原1号窯出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターの御許可と格別のお取り計らいを得て、実見・調査することができました。また、調査に際して次記の方々から高配を賜るとともに御教示を得ました。明記して深く感謝の意を表します。

井上(佐藤)麻子・鵜飼雅弘・ト部行弘・蟹江吉弘・佐藤公保・東影 悠。

註

- 1) 石神遺跡を含め、飛鳥・藤原地域から少なからず尾張産須恵器が出土していることについては、既に次記の論考などでも指摘がある。西口壽生「石神遺跡出土の篋書き土器」『年報 1993』。城ヶ谷和広「壬申の乱後の須恵器生産～猿投・美濃須衛・湖西～」『かにかくに 八賀晋先生古稀記念論文集』三星出版、2004。巽淳一郎「藤原京・平城京」『愛知県史 別編 窯業 1 古代 猿投系』愛知県、2015。高橋透「6～7世紀のシナノにおける東海産流通」『信濃大室積石塚古墳群研究Ⅳ—大室谷支群ムジナゴロー単位支群の調査—考察編』明治大学文学部考古学研究室。
- 2) 以下、飛鳥Ⅰ～Ⅴについては、西 弘海「藤原宮西方官衙出土土器の編年と西方官衙についての考察」『藤原報告Ⅱ』1978、を参照のこと。
- 3) 焼土面SX037については、出土した須恵器甕片の中に丘陵斜面上方の調査(第171次)で性格不明の焼土面多数とともに検出された炭溜りSU250からの出土品と接合できるものが存在することから、形成要因を乙巳の変以外に求めうる可能性が指摘されている(『紀要 2013』)。ただし、皇極天皇3年(644)に建設されたが翌年には焼失したと考えられている蘇我邸と、SX037出土土器を同時代のものと考えることが否定されたわけではない。
- 4) この点については、2000年に開催された第1回東海土器研究会の席上、既に金田明大が口頭で指摘している。なお、SD110出土の杯蓋・皿蓋の口縁部全34片のうち、「かえり」をもつものは17片で確実な尾張産を含まず、「かえり」をもたないものは17片のうち6片が尾張産、3片が美濃須衛窯産とみられる。
- 5) 奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡Ⅳ—外郭北部域の調査—』2011。
- 6) 飛鳥京跡SD0901出土須恵器の産地比定は、奈良県立橿原考古学研究所の御理解・御許可を得て、実見した上でおこなった。調査は、尾野・大澤両名で実施したが、基本的に産地判断の責任は尾野にある。
- 7) 註5文献の図70-8・10・13～17・20～22・28・30・32・33・36、図71-3・11・13・14・16・18・20～22・24、図

- 76-8・13・20・23・26・27・29～35、図77-1・2・4～7・14・15・17～19・21・23～27・31・32・35・37・39・42・44～47、図78-6・21・28・31・32・34、図79-6・9・13・14・18・19・23・24・26・27・29、図80-1・6・8・9・11・12、図81-1・19、図82-7・10・13・16・17・21～24、図83-13～15・23、図84-2・6・8、図85-3・4、図86-1。
- 8) 註5文献の図70-1・2・7・9・24・29・37・38、図71-2・12、図72-2、図76-2・9・11・22・36・38・39、図77-3・9・22・30・38・48・49、図78-1・13・19、図79-3・4・17・22・25、図80-3、図81-2・7・13・17・18、図82-14・25・26、図83-2・4・9・24、図85-6・8。
- 9) 佐藤麻子「飛鳥京跡第164次調査石組溝SD0901出土土器の器種分化に関する検討」(前掲註5文献所収)。
- 10) 重見 泰「後飛鳥岡本宮と飛鳥浄御原宮—官殿構造の変遷と「大極殿」出現過程の再検討—」『ヒストリア』第244号、2014。
- 11) 飛鳥京跡SD0901出土土器の年代的な位置づけについては、既に次記の論考でも同趣旨の見解が示されている(小田裕樹「土器群の位置づけ」『奈良山発掘調査報告Ⅱ—歌姫西須恵器窯の調査—』奈文研、2014。
- 12) 計測した口径は、外端径である。
- 13) 『藤原報告Ⅱ』に所載の計測値によれば、須恵器杯BⅢの口径は13.4～15.8cmである。これはSK1285や、次に述べるSD640における同器種の口径分布と概ね一致している。以下、本稿ではこの大きさの杯Bを便宜的に「杯BⅢ」と呼ぶ。
- 14) 瀬戸市埋蔵文化財センター『愛知県長久手町 丁子田窯跡・市ヶ洞1号窯跡—長湫南部土地区画整理に係る発掘調査報告—』2007。
- 15) これは、かつて西弘海が「いささか奇妙な表現ではあるが」と若干の躊躇を示しつつ「律令的土器様式」と呼んだものが成立する背景として、「大量の官人層の出現」を想定したのと共通する視点である(西 弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考(小林行雄先生古稀記念論文集)』平凡社、1982)。
- 16) 愛知県埋蔵文化財センター『細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯』1999、および前掲註14文献。
- 17) 前掲註1西口論文。
- 18) 高針原1号窯で杯A・Bとの共伴が確認されたものと同時期に属する杯Hは、尾張の古墳や堅穴住居からの出土品としては珍しくないものである。
- 19) 念のために記しておく、ここで論じているのは尾張産須恵器の年代であって、必ずしも貼石遺構周辺出土土器全体の年代を意味しない。そもそも貼石遺構周辺出土の土器群は、『藤原報告Ⅳ』に記されているように、貼石遺構埋土である粘土層(下層)や埋立土(中・上層)だけでなく、柱抜取穴や上層包含層・攪乱土の出土品までを包括したもので、まとめて暦年代論の基準となしうる性格のものではない。むしろ、水落遺跡出土土器の中から暦年代論の基準たりうる資料をあげるならば、型式論的な判断からではなく、出土層位からSB200の基壇中もしくは漆塗木箱の裏込めに含まれていたと判断される土器(報告書の30・56・101・104・112・113・117・123)で、漏刻造営の斉明天皇6年(660)以前に位置づけが可能である。ただし、小破片が多く、その点では必ずしも良好な資料ではない。また、この8点の中に尾張産須恵器は含まれていない。
- 20) 石神遺跡SD640出土品(第3・4次調査出土分)から抽出した須恵器202点のうち、26%に美濃須衛窯産の可能性があるとみている。

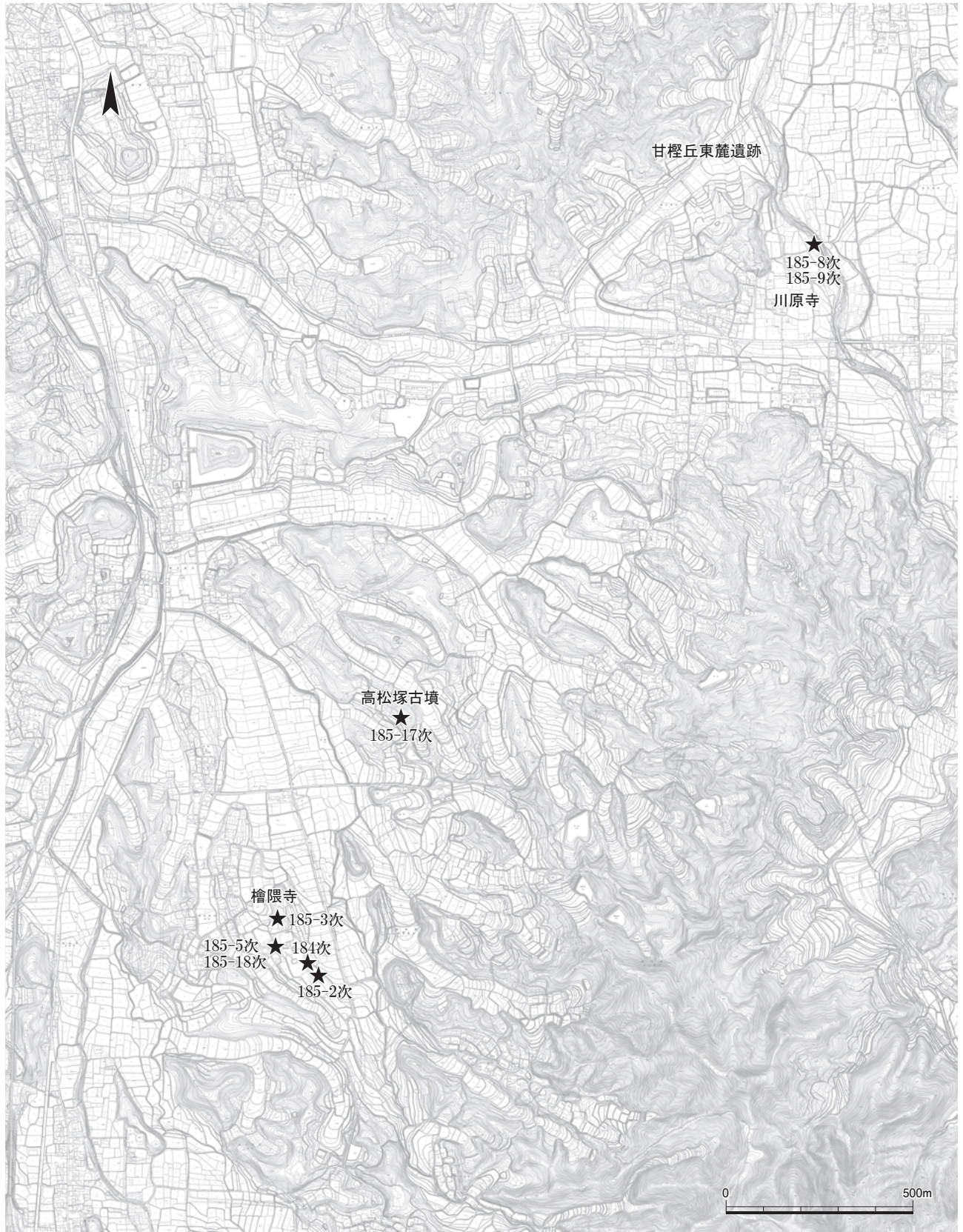


図111 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000